

The Tempest から *Forbidden Planet* へ

- Caliban は Id の怪物か? -

菊地 善太

日本大学大学院総合社会情報研究科

From *The Tempest* to *Forbidden Planet*

- Is Caliban a Monster of the Id? -

KIKUCHI Zenta

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The 1956 film *Forbidden Planet* is known to be an adaptation of Shakespeare's *The Tempest*. However, at the time of release, no information about this film was provided. It was not even clearly mentioned until 1975 when Irving Block, one of the two authors of the story on which the screenplay was based, suggested that they had used the story of *The Tempest*. It may be a hidden message of the film that Shakespeare's *The Tempest* was the genuine original. In this paper, the meaning of a murder by the Id's monster, the death of Dr. Morbius, and also whether Caliban is a monster of the Id or not were considered. The meaning or the message of this film, which emerges through a comparison of both works, will occupy a greater position in Shakespeare studies in the 21st century when the possibility of the happy co-existence of human beings and robots will be discussed and earnestly desired.

1. はじめに

映画『禁断の惑星』(*Forbidden Planet*, 1956) はシェイクスピアの『テンペスト』の翻案作品である。

『キャリバンの文化史』(*Shakespeare's Caliban: A Cultural History*, 1991) やアーデン版『テンペスト』(1999) を著したヴァージニア・メーソン・ヴォーンとアルデン・T・ヴォーン(Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan) は、この映画について、

いまやカルト映画の古典となったこの戦後の映画において、プロスペローはアルテア IV という遠くはなれた惑星に移送させられている。その惑星では、(ウォルター・ピジョンが演じるところの) モービウス教授が彼の科学的な研究を続けており、ロボット(ロビー、この映画でのエアリエル)を造り、娘のアルティラ(アン・フランシス演じるところのミランダ)を育てている。¹

Now a cult classic, this postwar film transports its Prospero figure to Altair-IV, a distant planet, where Professor Morbius (Walter Pidgeon) continues his scientific investigations, builds robots (Robby, the film's Ariel) and raises his daughter Altaira (the Miranda figure played by Anne Frances).²

と述べて、『禁断の惑星』と『テンペスト』の相関を論じている。1991年の『キャリバンの文化史』でも同様の指摘をしていた。³

しかし、1971年のロジャー・マンヴェル(Roger Manvell)の『シェイクスピアと映画』(*Shakespeare and the Film*)では、この映画は全く取り上げられていない。⁴

この映画が『テンペスト』をモチーフとした作品であったことは、1956年の映画公開当初には一切公表されず、コメントもされなかった。ジュディス・

ブキャナン (Judith Buchanan) は、9つの雑誌名や新聞名を挙げて、当時のメディアがシェイクスピア作品との関連を言及しなかったことを指摘し⁵、さらに1975年に原作者の一人であるアーヴィング・ブロッックが語るまで、関係者の誰もこの映画と『テンペスト』との関係を論ずる者はいなかったと指摘している⁶。

『禁断の惑星』と『テンペスト』の両者の関係は、逆に言えばそれほど気付きにくいものであり、『テンペスト』が原作であることは、言わば秘められたメッセージであったと言える。

ダグラス・ブロード (Douglas Brode) は、この映画と原作の関係を、「『テンペスト』に対する『禁断の惑星』の関係は、『マクベス』に対する『蜘蛛巣城』と同じような関係を持っている」(*Forbidden Planet has the same kind of relationship to *The Tempest* that *Castle of the Spider's Web* does to *Macbeth*.⁷) と論じている。『蜘蛛巣城』も、登場人物名も場所も時代も原作とは全く異なっていて、翻案と原作の距離感が似ている。これがシェイクスピアの『マクベス』を原作と言えるなら、『禁断の惑星』もまた『テンペスト』を原作と言える。*

本論では映画『禁断の惑星』の主題を、上記秘められたメッセージと捉え、シェイクスピア原作の主題と重ねてより深く考察する。

『テンペスト』は、福原麟太郎が、「長い遍歴の後にシェイクスピアは、こういう調和の世界、寛容と平和の世界の美しさ、それが“brave new world”であるという思想に到達した⁸」と語ったように、シェイクスピアの劇の中でも、とりわけ調和の世界、寛容と平和の世界の美しさを謳った劇である。

本論は、映画『禁断の惑星』について、『テンペスト』の「調和の世界、寛容と平和の世界の美しさ」というテーマに照らして読み解くことになる。

2. 先行研究における人物相関

先行研究(参考文献)を渉猟したが、『禁断の惑星』と『テンペスト』の相関をしかと捉えたものはない。両者の粗筋の相関関係を詳細に論じたものもない。そこで、人物の相関関係に着目して、右表のようにまとめてみた。

表1. 人物の対応

	『禁断の惑星』	『テンペスト』	参考文献
1	Morbius	Prospero	1, 3, 4, 5, 6, 7, 10, 11, 16
2	Altaira	Miranda	1, 5, 10, 11
3-1	Robbie	Ariel	1, 4, 5, 10, 11
3-2	Robbie	Ariel & Caliban	6
4-1	Monster (of the Id)	Caliban	1, 3, 4, 5, 6, 7, 10, 11
4-2	Monster	Prospero (Morbius)'s Id	1, 3, 4, 5, 6, 7, 10, 11, 18, 19, 20
4-3	Monster	Miranda (Altaira)'s Id	18
5	Adams	Ferdinand	10
6	Cock	Trinculo	10
7	Beasts	Caliban	

表中の参考文献の番号は、本論文・文末の「参考文献」の文献番号に依る。文献番号が1であれば、1と記す。

ここで問題になるのは、ロボットのロビーとイドの怪物の位置づけである。また、エアリエルとキャリバンの位置づけであろう。モービウスがプロスペローに対応することや、アルティラがミランダに対応することは、異論なく、自明と考えられる。

文献6のハーラン・ケネディ (Harlan Kennedy) は、3-2のロビーをエアリエル&キャリバンと見ることにに関して、ロビーに二面性があることを指摘し、「彼(ロビー)は宇宙船のコックと共にキャリバンのように酒を飲み、しかしエアリエルのように主人の高度な命令に従う」(He gets drunk Caliban-style with the (space) ship's cook; but Ariel-like he does his master's higher bidding⁹) という。

但しケネディは、上記のように述べつつも、キャリバンについては、イドの怪物こそが本当のキャリバンであると論じて“the film's true Caliban, the Monster of the Id”¹⁰としている。

ロビーにキャリバンを見出す指摘は、上記ケネディの指摘しか見つけられないが、ロビーとコックのやり取りは、十分に『テンペスト』のキャリバンとステファノーやトリンキュローとの掛け合いを連想させるとのもっともな指摘である。

キャリバンをイドの怪物と決め付けなければ、ロビーの中にその属性を見出すほかにも可能性は考えられよう。7で、虎や鹿といった獣達とキャリバンを結びつけたのは、筆者の仮説である。この惑星の獣達は、アルティラの友人という設定であり¹¹、多少の従性がある半野生の獣と考えられる。すると、獣性と従性をもつ獣が、キャリバンとイメージが重なって見えるのである。

この映画において、キャリバンの性質の中で、主に野生的な性質を獣に、言葉を喋り愉快地に振舞う性質をロビーに、それぞれ分割して割り当てたと考えられよう。7は、そういう意図で加えた仮説である。

また、文献 17 で石田一は、4-3 の怪物について、次の三つの理由から、アルティラの潜在意識こそが怪物の正体だと考えられると論じている。理由の一つ目は、怪物が最初に通信機を壊した動機として、船長に恋したアルティラが宇宙船の出航を邪魔しようとしたと考えられること。二つ目は、次に怪物による殺人事件が起きたとき、アルティラはまさに事件そのものを悪夢として見ていたこと。そして三つ目は、最後にモービウス邸を襲撃したことは、彼女を地球に行かせまいとするモービウスへの怒りの現われと考えられること。その三つを理由として挙げている¹²。

イドの怪物の正体は、映画の中で、アダムズの台詞による誘導から、モービウスのイド、即ち潜在意識が具現化し、暴走したものとされている。上記石田の仮説は、可能性としては考えられるが、モービウスのイド説を完全に否定できるものではない。なぜなら、通信機の破壊を出航の邪魔をすることと考えるのは短絡的であるし、アルティラの悪夢は、イドの怪物の作用と考えれば、原因がアルティラにある必要はない。さらにモービウス邸の襲撃についても、ストレスに対する攻撃と考えれば、モービウスのストレスの元である自分自身やアダムズを襲うことは考えられるからである。

逆に、アルティラのイド説を取ると、クライマックスでモービウスのイド説を訴えるアダムズの台詞は非常に不自然なものとなり、映画の流れ上、それは考えづらい。

いずれにしても、人間の潜在意識が暴走したものがイドの怪物であると考えられるが、それがキャリバンと見なせるか否かはまた別物である。

表1では、文献 1、3、4、5、6、7、10、11と、多くの先行研究でキャリバンをイドの怪物と見なす記述が見られ、これが主流となっているが、殆どが決め付けの記述であり、そこに納得できる十分な理由付けは見つけられない。仮に、キャリバンは乱暴なイメージだから、乱暴なイドの怪物と結び付けたというだけでは、いささか議論が乱暴すぎるであろう。本件の問題は、もう少し物語の筋の関連なども見てから、改めて考察したいと思う。

3. 『テンペスト』との粗筋の相関

本節では、『禁断の惑星』と『テンペスト』の物語について、両者の筋の相関を少し詳しく見てみたい。最初に筆者の仮説を示し、それをもとに論証する。

下表は筆者が検討した両者の場面の対応表である。表中で Ch.1 はチャプター 1 を、1-1 は一幕一場を意味している。チャプターは、市販 DVD¹³のチャプター割りに依った。

表 2 . 場面の対応

『禁断の惑星』	『テンペスト』	備考
Ch.1 オープニング画面		
Ch.2 メイン・タイトル		
Ch.3 科学の進化のナレーション		
Ch.4 宇宙航海	1-1 航海	
Ch.5 レーダー異常	1-1 航海 - 異常の発生	1
Ch.6 ロボットのロビー登場	2-1 エアリエル登場	

Ch.7 モービウス登場	1-2 プロスペロー登場	
Ch.8 ロビーの能力、邸の設備（超越技術）	1-2 エアリエルと島の話	
Ch.9 モービウスの過去語り	1-2 プロスペローの過去語り	
Ch.10 アルタ（アルティラ）登場、船長達と対面	2-1 ミランダとファーディナンド、 5-1 ミランダとアロンゾー達の対面	2
Ch.11 アルタの友達の獣登場	1-2 キャリバン登場	3
Ch.12 伝送器の準備、コックとロビー	2-2 キャリバンと飲兵衛達の出会い	3
Ch.13 アルタのキス		
Ch.14 アルタの服		
Ch.15 見えない侵入者、伝送器の破壊事件発生	1-1 航海 - 異常	1
Ch.16 ロビーの能力（光線銃）と制約（殺傷禁止）	1-2 エアリエルと命令拒否（シコラクス事件）	
Ch.17 アルタの沐浴、船長が虎を射殺		
Ch.18 先史文明の話	4-1 精霊たちによる儀礼の幻影	4
Ch.19 超頭脳養成機の解説、実演	4-1 精霊たちによる儀礼の幻影	4
Ch.20 巨大地下設備の解説、移動	4-1 精霊たちによる儀礼の幻影	4
Ch.21 宇宙船に異常、コックとロビー	1-1 航海 - 異常 3-2 キャリバンと飲兵衛達	1 3
Ch.22 見えない侵入者の第一殺人	1-1 航海 - 嵐	5
Ch.23 先史遺産接收をめぐる対立		
Ch.24 事件のなぞの探求	1-1 航海 - 嵐	5
Ch.25 光る透明怪物	1-1 航海 - 嵐	5

との戦闘、殉職		
Ch.26 アルタの悪夢、救助懇願	1-2 ミランダの悪夢、救助懇願	
Ch.27 アルタとアダムズの愛、再びイドの怪物登場	3-1 愛に落ちたミランダとファーディナンド	
Ch.28 怪物の攻撃、モービウスの死	3-3 雷電と怪鳥の攻撃（悪人への罰）	6
Ch.29 惑星からの脱出	5-1/epilogue 離島と帰還	
Ch.30 エンド・クレジット		

1：船の事件ということで、とりあえず幕場 1-1 に分類した。

2：アルティラの、モービウス以外の人間との初対面であり、後の恋人アダムズ船長との初対面でもあるが、『テンペスト』のミランダとファーディナンドのような強烈な一目ぼれは無い。幕場 5-1 の対面場面の雰囲気近くに感じた。

3：前節の筆者の仮説に依る。キャリバンの性質は二つに分かれ、ロビーの一部と、獣の一部になったと考える。

4：先史文明の高度な科学技術の奇跡が、『テンペスト』でいう魔法的なもの、女神達の恵みの祈りと豊穡の大地に対応すると考えた。さらに言えば、後者は精霊たちによって見せられた幻影であり、そうだとすれば前者もまた「幻」であるべきもの、「禁断の文明」とでも呼ぶべきものであり、それを有する惑星を「禁断の惑星」と呼べるのではないかと考えた。

5：幕場 1-1 と同様に船の事件であるが、事が殺人と衝撃が大きいので、殺人事件と人々の困惑の場面は嵐に相当すると考えた。次の場面でアルティラ（ミランダ）の悪夢が出てくるのも、これを 1-1 の嵐と考えた理由である。

6：これはモービウス邸での事件であり、宇宙船での出来事とは一線を画す。よって『テンペスト』の出来事で、幕場 1-1 の嵐とは同一視できない。ぴったり一致する場面はないが、強いて言えば幕場 3-3 でエアリエルが魔法で雷電を起こし、怪鳥となって三人の悪者を攻撃する場面のイメージに近い。

こうして表2を見てみると、シェイクスピアの『テンペスト』の殆どの場面イメージが、映画『禁断の惑星』の場面イメージに置き換えられていることが確認できる。しかし、当然に相違点もある。下に、『禁断の惑星』で漏れている場面、或いは大きく相違する場面（表2と重複あり）を抜き出してみた。

表3．場面の相違箇所

『テンペスト』	『禁断の惑星』	備考
1-1 嵐による難破	Ch.22-25 魔法による幻覚や思い込みではなく、オーバーテクノロジーの産物により実際に殺人事件が発生する。	
1-2 キャリバン登場	Ch.6 明確にこれがキャリバンと言える人物は登場しない。	
2-1 アロンゾー達の上陸	Ch.6 船長らは惑星に上陸するが、特に悪人はおらず、殺人未遂事件は起こらない。	
2-1 ミランダとファーディナンドの出会い	Ch.10 一目ぼれなし。	
3-1 ファーディナンドの試練（丸太運び）	Ch.13, 14 アダムズに恋愛の試練なし。「アルタのキス」、「アルタの服」と、『テンペスト』にない出来事が連なる。	
3-3 雷電と怪鳥による攻撃（悪人への罰）	Ch.28 『テンペスト』との明確な相関はない。そもそもモーピウスはアダムズ達に復讐する理由を持っていない。	
4-1 精霊たちによる儀礼の幻影	Ch.18-20 これも明確な相関はない。左記は婚約祝賀の祝宴とも言えるが、『禁断の惑星』では祝宴と呼べる宴はない。	1

5-1 赦しと和解	Ch.23 で対立したモーピウスとアダムズは、Ch.28 でも和解はなく、モーピウスの死で死に別れる。	
-----------	---	--

1：祝宴に関して、映画の制作段階では、ラストシーンでアルティラとアダムズの結婚式が予定されていたことが、『ホラー・ワールド』誌の特集で、その場面の写真入りで指摘されている。¹⁴

このように、『テンペスト』と『禁断の惑星』の大きな違いを挙げる事が出来る。さてここで重要なことは、以下の三点である。

一、

前者は魔法の世界であり、後者はオーバーテクノロジーの超科学技術の世界であること。前者は魔法による幻影・幻聴を見せるのに対し、後者は先史科学文明の遺産が引き起こすもので、現実の事件として破壊や殺人を生じさせる。劇のタイトルでもある「嵐」の出来事は、後者では取り返しのつかない殺人となる。すなわち、前者は秩序を回復させるためのいわば白魔術の魔法であるが、後者は科学技術の暴走であって、秩序を回復させるといった方向性は見られない。

二、

前者は復讐と赦し、和解といった設定があるのに対し、後者はそもそも復讐の設定が存在しないこと。Ch.23 の対立に対する Ch.27-28 での和解のプロセスも見られず、後者では「赦しと和解」といったテーマを表現することが不可能になっている。

三、

前者はキャリバンが一人の登場人物として存在するが、後者はそうではないこと。これによって後者の物語は、前者と否応無く異なって来る。

だがもしここで、筆者の仮説を捨て、前節で主流意見と確認した「キャリバンはイドの怪物」という仮説を取り上げるなら、表2、表3は、上記とはかなり違ったものになるであろう。

その場合、プロスペローとキャリバンの接点が限りなく無くなってしまふ。主人格と潜在意識は、後者が前者を意識することは全く無いであろうし、前

者にしても、精神カウンセリングでも受けない限りは、後者を意識することはないと思われるからである。その場合、キャリバンは、プロスペローやミランダから、なかば独立した無法の存在になる。

本来のキャリバンは、プロスペローに反発しつつも隷従している半獣半人の奴隷であるが、憎まれつつも会話を楽しみ、音楽を喜び、詩のような言葉を発する芸術の人でもある。だが、ここでのキャリバンは、誰に教育されるわけでもなく、誰と会話するわけでもなく、支配も被支配もない、ただただ世間から隔離された孤独な環境の中で、潜在意識という情動に動かされて、鬱憤を暴力で発散させる存在である。周囲の人間から隔離され、言葉を発することもできず、まともに感情の判断もできない。もはやキャリバンは、キャリバンと呼べる存在ではなくなっている。

キャリバンをイドの怪物と見なす場合、惑星に棲み付いた獣たちも、単なるおまけの出来事になってしまう。キャリバンを単に化け物の表象として見るならば、ロボットのロビーに本来のキャリバンの性格の一部を投影することも、殆ど意味をなさない。

従って、キャリバンはイドの怪物と見なすよりも、キャリバンの性質は二つに分かれ、ロビーの一部と、獣の一部になったとする筆者の仮説をとりたい。

以上、『禁断の惑星』と『テンペスト』において、物語の筋の対応を中心に考察してきた。表2から、この映画は『テンペスト』の翻案と言える筋の相関を持っていることが示唆されるが、表3にあるような大きな相違点も見られるのである。それについては、次節で考察したい。

4. 『テンペスト』の主題から

『テンペスト』の主題を考えながら、この映画の主題について考察する。

『テンペスト』は、復讐劇、和解劇など様々な解釈がなされてきた。本論では、冒頭節で述べたように、特に福原麟太郎の言う「調和の世界、寛容と平和の世界の美しさ」というテーマに注目して考察する。

大山俊一は「劇の焦点は明らかに主人公の悟り、和解、再生という明るい面に向けられている¹⁵」と

指摘し、さらに世界観（宇宙観）について「全宇宙は神を中心として各々が然るべきところを占め、美しい秩序が宇宙の調和を奏でているということがその眼目である¹⁶」と述べて、「美しい秩序と宇宙の調和」のテーマを謳っている。

劇の主題は主人公の人柄にも大いに左右される。齋藤勇は「Prospero は博学であり卓見があるのみならず、静平寛厚な君子人である¹⁷」と、プロスペローが穏やかで寛容な人間であることを指摘している。

さて、前節で見たように『テンペスト』と『禁断の惑星』の違いとして、魔法と科学技術、幻影と現実の対立がある。前者は主に精神世界に働きかけるが、後者は現実の事件となって現われ、遂には暴行・殺人をも引き起こしてしまう。情状酌量の余地なき暴行・殺人は、特に平和を望む者にとっては何より避けるべき禁忌である。ここにおいて『禁断の惑星』は、「寛容と平和の世界」から脱落する。

次の違いとして、前者は復讐と赦し、和解をテーマ設定するのに対し、後者にはテーマ設定がない。『テンペスト』の主題から外れることを意味するものである。

さらに、三つ目の違いとして、キャリバンの設定が『テンペスト』における設定から大きく変わったことをあげた。

仮に、キャリバンの獣性から、キャリバンを虎や鹿などの惑星に棲む野獣と見なしたとき、殆ど飼いや慣らされておらず、鋭い爪があり牙があるこの野獣たるキャリバンは、原作『テンペスト』のキャリバンよりも、より野生的で獰猛であると言えるだろう。

しかし、モービウスやアルティラが長い間無事だったことから、この野獣たるキャリバンは必要を超えて理不尽な殺生は犯さないことが見て取れる。映画『禁断の惑星』では、残念ながら Ch.17 で一匹の虎がアダムズによって射殺される。この映画では森の平和は守られなかった。「平和の世界」のテーマはここでも見失われている。

また、ロボットのロビーの中にキャリバンの愉快さを見つけて、ロビーの一側面をキャリバンと見なした場合、今度のロボットたるキャリバンは殺生を犯さない。しかしそれはモービアスのプログラムによって殺生できなくされているものであり、殆ど感

情を欠いた行動であるように見える。

「寛容と平和の世界」と言うとき、「寛容」という言葉には感情のあり方を示す意味が込められている。同格の「平和」という言葉も、平和を願う気持ちが含意されていると考えられる。

エアリエルたるロビーにしても、キャリバンたるロビーにしても、彼らを人間として扱わず、人間性を殆ど除去した如き設定は、これまた「寛容と平和の世界」から外れているとせざるを得ない。

キャリバンをイドの怪物と見た場合はというと、このキャリバンは本能の赴くままに暴行を働いてしまうので、これは全く「寛容と平和の世界」からかけ離れた存在といえる。

「寛容と平和の世界」というテーマは、少なくともこの映画のテーマとしては似つかわしくないと結論づけられよう。

それでは、映画『禁断の惑星』のテーマは、あるとすると、一体何と考えられるか。上記の考察から、科学技術の暴走を許してはいけないという警告・警鐘であり、人的存在をヒトとして扱へというメッセージであり、そして「調和と、寛容と平和の世界の為に」という、ヴィジョンある行動を促すメッセージである。

観客は、シェイクスピア作品が原作であることを知ったときに、これが『テンペスト』と違っていかに悲しい結末なのかと気付かされる。「平和の世界」へのヴィジョンが欠けていることを、強く気付かされる。

仮にシェイクスピアがこの映画作成に参加していたら、彼は決してモービアスを殺さないであろう、と思う。未来の科学万能社会についても、「調和と、寛容と平和の世界」を構築する希望を与えてくれるに違いないのである。

最後に、タイトルの「禁断の惑星」(‘Forbidden Planet’)の言葉の意味について考えたい。当然作品の主題に関わる。筆者は、先に表2の4で述べたように、それが精霊たちの祈りとか魔法とかと同様に、「幻影」とか「夢幻」であるべきものという解釈をしたい。もし、先史文明の想像を絶する高度な科学技術が、『テンペスト』の女神達の恵みの祈りやプロスペローの魔法の顕現として対応付けられるなら、

魔法や祈りが「幻影」や「夢幻」となって消え去るように、先史文明の超科学技術も「幻影」や「夢幻」となって消え去るべきであろう。人間が持つべからざる超高度技術を持った惑星に、人間は立ち入るべきではない。その意味で「禁断の惑星」と呼んだのではなからうか。

5. 最後に

映画『禁断の惑星』はシェイクスピアの『テンペスト』の翻案であるが、これまで殆どの研究者は、前者におけるモービアス(プロスペロー役)のイドの怪物を、後者におけるキャリバンと見なしてきた。

しかし、殺人さえも引き起こすキャリバンは、原作『テンペスト』のキャリバンとは全く別物と思える。そこで、映画を見直し、キャリバンがロビーの一部と獣の一部に分かれて翻案に移植されたとする仮説を立てた。

この仮説のもとで、原作『テンペスト』は、『禁断の惑星』と粗筋全編を通して高い相関が見られたが、作中で殺人が引き起こされる事実は変わらず、映画のテーマは「平和の世界」からほど遠い。

では、この映画のテーマは何なのか。単に科学技術万能の世界への警鐘とするだけでは物足りない。『テンペスト』の翻案であることは隠されているが、それを知ってこれを観れば、『テンペスト』のテーマの一つである「平和の世界」へのヴィジョンの欠如は強烈に浮かび上がる。

翻案であることを隠すと共に、「平和の世界」へのメッセージも一緒に秘めて、反面教師的なメッセージとして観客に届けようとしたのではなからうか。

さらに、「禁断の惑星」という言葉からは、人間が持つべきでない技術が在る、人間が踏み込むべきでない惑星、そんなメッセージが聞こえてくる。

映画の「禁断の惑星」は爆発して消えてしまったが、未来は、第二、第三の「禁断の惑星」を生み出す可能性がある。しかし、我々には、「禁断の惑星」を「希望の惑星」に変える選択肢もあるのである。そんなメッセージを受けることも可能であろうか。

代表的『テンペスト』研究書、アーデン版『テンペスト』の著者、ヴァージニア・メーソン・ヴォーンとアルデン・T. ヴォーンは、この映画に言及し

ながらも、上記のような結論にまでは至っていない。また他の研究書もそこまで考察を深めてはいない。しかし、以上論じてきた考察から、上記結論を導くことは不可能ではなからう。21世紀、人間とロボットの共存が問題となるであろう世紀においては、シェイクスピア研究上にこの作品の占める位置は、次第に大きなものとなるであろう。

【註】

- ¹ 筆者訳。以下、特に記載がなければ拙訳。
- ² Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan, "Introduction", *The Tempest*, Arden Shakespeare, 1999, p.111.
- ³ Alden T. Vaughan and Virginia Mason Vaughan, *Shakespeare's Caliban: A Cultural History*, Cambridge, 1991, pp.204-206.
- ⁴ Roger Manvell, *Shakespeare and the Film*, Barnes, 1971.
- ⁵ Judith Buchanan, "Forbidden Planet and the Retrospective Attribution of Intentions", Deborah Carmell, I.Q. Hunter and Imelda Whelehan (eds.), *Retrovisions: Reinventing the Past in Film and Fiction*, Plute, 2001, p.149.
- ⁶ Ibid., pp.152-153.
- ⁷ Douglas Brode, *Shakespeare in the Movies --From the Silent Era to Today*, Oxford, 2000, p.223.
- ⁸ 福原麟太郎「シェイクスピア講演：『あらし』」『福原麟太郎著作集1』研究社、1968(昭43) p.463 (1955(昭30)・1・18外務省研修所講演より)。
- ⁹ Harlan Kennedy, "Prospero's Flicks", *Film Comment*, 28, No. 1, Jan. 1992, p.47.
- ¹⁰ Ibid, p.47.
- ¹¹ 映画で、アルティラがモーピウスに "I have you and Robby and all my freinds." と語り、その後に友達の鹿や虎を呼び出す場面 (Chapters 10-11) がある。
- ¹² 石井一「イドの怪物の正体はアルティラだ！」『ホラー・ワールド』(季刊、第2号) MONSTERS 出版社、1980.7.20、pp.32-35.
- ¹³ DVD：フレッド・マクラウド・ウィルコックス監督、映画『禁断の惑星』(Film: *Forbidden Planet*, MGM, 1956)、ワーナー・ホームビデオ、2000.
- ¹⁴ 西本雅亮「禁断の惑星」雑学事典』『ホラー・ワールド』、p.30.
- ¹⁵ 大山俊一『シェイクスピア人間観研究』篠崎書林、1957、p.337.
- ¹⁶ 同上、p.337.

- ¹⁷ 齋藤勇『シェイクスピア研究』研究社、1949、p.386.

【参考文献】

[洋書]

- 1 : Douglas Brode, *Shakespeare in the Movies --From the Silent Era to Today*, Oxford, 2000
- 2 : Judith Buchanan, "Forbidden Planet and the Retrospective Attribution of Intentions", Deborah Carmell, I.Q. Hunter and Imelda Whelehan (eds.), *Retrovisions: Reinventing the Past in Film and Fiction*, Plute, 2001, pp.148-162
- 3 : Deborah Cartmell, *Interpreting Shakespeare on Screen*, Mcmillan, 2000
- 4 : Rex Gibson (ed.), *Cambridge Student Guide: The Tempest*, Cambridge, 2004
- 5 : Russell Jackson (ed.), *The Cambridge Companion to Shakespeare on Film*, Cambridge, 2000
- 6 : Harlan Kennedy, "Prospero's Flicks", *Film Comment*, 28, No. 1, Jan. 1992, pp.45-49
- 7 : David Lindley, *The Tempest*, Shakespeare at Stratford, Thomson Learning, 2003
- 8 : Roger Manvell, *Shakespeare and the Film*, Barnes, 1971
- 9 : Stephen Orgel (ed.), *The Tempest*, Oxford, 1987
- 10 : Alden T. Vaughan and Virginia Mason Vaughan, *Shakespeare's Caliban: A Cultural History*, Cambridge, 1991
- 11 : Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan (eds.), *The Tempest*, Arden Shakespeare, 2000 (Originally published by T. Nelson, 1999)

[和書]

- 12 : 大山俊一『シェイクスピア人間観研究』篠崎書林、1957
- 13 : 齋藤勇『シェイクスピア研究』研究社、1949
- 14 : 末松美知子「シェイクスピア・アラカルト 原文以外で味わうシェイクスピア」高田康成ほか編『シェイクスピアへの架け橋』東京大学出版会、1998
- 15 : 福原麟太郎「シェイクスピア講演：『あらし』」

『福原麟太郎著作集 1』研究社、1968

16：森祐希子『映画で読むシェイクスピア』紀伊国屋書店、1996

[和雑誌]

17：「禁断の遊星、旅行：実現は 300 年后か？」『画報・近代映画』(Vol.4, No.9)近代映画々報社、1956.9

18：森卓也、聖咲奇、石田一ほか編「特集『禁断の惑星』」『ホラー・ワールド』(季刊、第 2 号) MONSTERS 出版社、1980.7.20、pp.16-35

[パンフレット]

19：映画『禁断の惑星』パンフレット、1956 (表紙タイトルは“FORBIDDEN PLANET”のみ)

20：映画『禁断の惑星』パンフレット、1956 (表紙タイトルは『禁断の惑星 FORBIDDEN PLANET』、表紙に「丸の内東宝劇場」の記載有り)

[映像資料]

21：(DVD) フレッド・マクラウド・ウィルコックス監督、映画『禁断の惑星』(Film: *Forbidden Planet*, MGM, 1956)、ワーナー・ホームビデオ、2000

(Received : September 30, 2006)

(Issued in internet Edition : November 1, 2006)